

NEWSLETTER



大阪女学院大学 大阪女学院短期大学

教 員 養 成 セ ン タ ー

| | |
|--|--|
| ● 巻頭エッセイ 言語活動の潮流を読む：英語プレゼンテーション..... 1 | ● 授業の玉手箱「よい授業についての一考察」..... 4 |
| ● 2012 年度勉強会「英語の教え方教室」報告..... 2 | ● 書籍紹介『なぜあの人は中学英語でもネイティブと仕事ができるのか』.. 4 |
| 第 15 回勉強会「英語の教え方教室」..... 2 | ● 教育実習参観..... 4 |
| 第 16 回勉強会「英語の教え方教室」..... 3 | ● 編集後記・10 月勉強会案内..... 4 |

巻頭エッセイ

言語活動の潮流を読む：英語プレゼンテーション

東條 加寿子

何気なく合わせたテレビのチャンネル^{注1)}で、クレイ・シャーキー (Clay Shirky) のプレゼンテーションを聴いた。聴き終って圧倒された。テーマは、Cognitive Surplus (知的余剰)。ネット時代の現代、ウィキペディアなどにみられるように、人はなぜ自分の書いたものや制作したものをネット上に無料で公開するのかについて「知的余剰」という独自の概念を使って説明がなされている。シャーキーによれば、経済的対価を求めることなく、時間的余剰を活用してネット世界で繰り広げられている我々の知的活動は、今や一つの新しい文化 (Culture of Generosity) を創出させるまでに至っている。そして、その文化においては、経済的制約 (economic constraints) よりも社会的制約 (social constraints) が人々の行動を支配しているという。ちなみに、シャーキーは同タイトルの著書を 2010 年に出版している^{注2)}。わずか 20 分ほどのこのプレゼンテーションは、シャーキー自身の 1 冊の著書に匹敵するどころか、その圧倒的な説得力と知的興奮、さらに番組内外の聴衆との一体感において、異次元の産物であった。プレゼンテーションの威力である。

今やプレゼンテーションの時代である。故スティーブ・ジョブズはプレゼンテーションの天才と称され、彼のプレゼンテーションがなぜ感動を与え続けるのか、その技術や秘訣を分析する本が次々に出版されている^{注3)}。ビジネスの世界では毎日 3,000 万件以上のプレゼンテーションが行われており、ビジネスの成否はプレゼンテーションの成否によるともいわれる。実際、アップル社製品の躍進はジョブズのプレゼンテーションの成功によるところが大きいといえるのかもしれない。

しかし、冒頭で紹介したクレイ・シャーキーのプレゼンテーションはビジネスプレゼンテーションではない。このプレゼンテーションは TED Conference で行われたプレゼンテーションの一つである。調べてみると、TED (Technology, Entertainment, Design) はアメリカの非営利団体で、Ideas worth spreading を謳い文句に年 1 回、テーマを定めて Conference を主催している。Conference では多くの著名人がプレゼンテーションを行い、聴衆として多くの人々が参加者する。ここで行われたプレゼンテーションを収録した動画アーカイブは圧巻で、膨大な数のプレゼンテーションがウェブ上で視聴できる^{注4)}。

さて、人々の英知を広めるためには、種々の手段がある。本として著す、スピーチで語る、またシャーキーの知的余剰活動ながらにウェブ上で作品を公開する、等々。しかるに、それらの手段を選択しないで、なぜ人は空間を共有してリアルタイムで語りかけ、リアルタイムで耳を傾けるのであろうか。なぜ、TED Conference のプレゼンテーションが一大現象となっているのであろうか。

プレゼンテーションでは、スピーカーは集まった聴衆に向かって壇

上で話をするが、スクリーンにビジュアル映像を映し出したり、物を持ち込んだりと、効果的な演出が可能である。またスピーチと違ってスピーカーは壇上で比較的自由に動き回る。そして、あらかじめ比較的短い制限時間が決められている。こういった特徴は、プレゼンテーションでは聴衆に“どのように伝えるか”が“何を伝えるか”に勝るとも劣らず重要であることを反映している。スピーカーは与えられた環境の中で聴衆に効果的に英知を伝達することに意識的・無意識的に工夫を凝らす。筆者は英語プレゼンテーションの特徴について研究しているが、プレゼンテーションは従来のスピーチや講演と比べて、話し言葉の特徴をはるかに色濃く備えている。具体的に例を挙げると、効果的なプレゼンテーションでは、代名詞 you の使用頻度が顕著に高く、また、いわゆる inclusive we と言われる聴衆を内包する人称代名詞が多用されることがわかっている。いずれも、聴衆に働きかけ、聴衆を巻き込む効果をもっている。結果として、聴衆と一体化した時空を生み出す。TED Conference では、スピーカーの intellectual power, emotional power, power of contribution in the world が注ぎ込まれ、スピーカーと聴衆が共有する経験は unforgettable moment となり、一つの感動が生まれるという。プレゼンテーションの本質や魅力がここにある。

人は、自分の考えを伝えたいという生来的な欲求をもっているといわれる。文字で伝える言語活動。話して伝える言語活動。近年ではツイッターやブログにみられるように話し言葉を文字化するという言語活動も盛んである。同時に、人はやはり、人に向かって話すことに大きな関心を持ち魅力を感じ続けている。スピーチの進化系、プレゼンテーションはシャーキーの説く知的余剰を伏線に、現代的言語活動として時代の潮流に乗っているであろう。

今回、プレゼンテーションについて考えてみたのは、英語教育に関わるものとして、時代の潮流を肌で感じ取っていることが、生徒たちに英語の感動を伝える一つの条件であると思うからである。そして、言うまでもなく、プレゼンテーションは英語教育において無限の可能性を秘めていると思うからである。

注1) <http://www.nhk.or.jp/superpresentation/> (NHK E テレ スーパープレゼンテーション 番組 HP)

注2) Shirky, Clay (2010). *Cognitive Surplus: Creativity and Generosity in a Connected Age*. ALLEN LANE.

注3) Gallo, Carmine (2010). *The Presentation Secrets of Steve Jobs: How to Be Insanely Great in Front of Any Audience*. McGraw-Hill.

注4) <http://www.ted.com/> (TED Ideas worth spreading)